**忍耐 2017/7/23**

**マタイ 13:24-30, 36-43 スティンストラ牧師**

先週の福音書の話を覚えている方もいるかもしれないが、イエスは驚くべき「種を蒔く人」の話をしていた。野蛮でめちゃくちゃとも言うべきやり方で種を撒き散らす人は、まちがいなく彼自身の町で、彼自身のことを話していた。彼はその町では長い期間を経て常識となったやり方を、無視してしまった。それゆえ、彼の突飛なまたあきらかに非科学的な手法は、即座に不快な緊張感を彼の周囲にかもし出した。貴重な種を誤った扱いをすることで、彼は「ばか者」というレッテルが町の人々の頭の中に植えつけれらてしまった。それは、最初の数年を東海岸の都市部で経験をつんだ私の知る牧師が、中世部の小さな田舎町に来て奉仕する場合とも似ている。彼は生きた鶏たちを見て感激し、そして、彼の鶏を一羽持つことにした。一人の農夫は、新しく来たパスターはきっと新鮮な玉子を喜ぶだろうと思い、雌鳥を彼に喜んでプレゼントした。しかし、説教者が朝に晩に、水晶のようなきらびやかな首輪とひもをつけて、その雌鳥を散歩させる姿を町の人々が見ることは、教会の人々にとって、おもしろおかしく笑い出さざるを得ないことだった。田舎町は田舎町の根強いしきたりがあり、鶏を家のペットのようにしてしまうなら、あるいは、不注意にも種をあらゆるところに撒き散らしてしまうなら、町の人々は瞬く間にそれを笑いの種にしてしまうのだ。

そのような背景があることを心に留めて、本日与えられた福音書の言葉を聴いてみよう。そして、農家として不適格な場合とはどういうことなのか、われわれが抱いている印象をさらに深めて考えてみよう。イエスはまたもや農業としては誤っていることを話している。前回のたとえ話が今日のたとえ話のすぐ前に書かれていたので、私たちはまた十分な収穫を得るために要求される知識にはとても疎い人のたとえ話を聞くことになるのではないかと想像してしまう。ここで彼は土地の持ち主であることがわかっており、多くの僕たちがいるような金持ちの主人であるので、自らの手で土を触ったり、あるいは収穫を得るのにどのようなことを習得していなければならないかということなど考えたこともなかった可能性がある。しかしながら、主人はあまりにもお高くとまっているのか、あるいはあまりにも頑固であるがため、単なる小作農家に意見を聞いて助けてもらうようなことはとてもできなかったようだ。それゆえ、彼は野原に出ていって彼の所有する種を撒き散らしてしまうのだろう。

すくなくとも今日の話においては、彼は畑から収穫を得るために先週の話よりかは、ましな仕事をしているように見える。しかし考えようによっては、だれかが怠慢な態度ゆえに打ちひしがれて町を去らなければならなくなるような、授業料の高いレッスンを教えているようでもある。というのは、僕たちが苗を見に行ったところ、植えられた良い麦のなかに、毒のある雑草がたくさんいっしょに生えてきていたのだ。この危機が今日の話を意味あるものにしている。この大きな不運に対していったいどのような対処をしなければならないのか？

僕たちは先祖から学び体験してきた有効な方法を知っており、毒麦が完全に育ってしまう前に、すぐに取り除きましょうと主人にもちかけた。僕たちはこのような脅威に対して、大切な麦の収穫を確保するために一瞬たりとも時間を無駄にできないという確信があった。しかしながら主人はまたもや今までに培った知恵とは正反対なことをしようとしていた。つまり収穫のときまで、良い麦も毒麦もいっしょに育つままに放っておこうという選択をする。主人には、毒麦を良い麦から取り除こうとすることは、良い麦までもだめにしてしまうという理由があった。一方が簡単に引き起こす破壊的行為は、他方を死においやる。ところが私たちがはっきりとした線を引こうとすると、われわれの世界を二分してしまうのである---わたしたちとあのひとたち、赤い州と青い州、罪人と聖人、信じている人と信じていない人---わたしたちはこの世でいっしょに住んでいるのだ、われわれは生き残るために互いに必要としているのだ。　主人にとっては良い麦の一本の苗さえも成長する前に抜かれてしまうようなことがあってはならなかった。おそらく町の人々にとっては主人は、まわりが辛抱強く待つしかないような、頭が鈍い人だと思われていたのではないだろうか。しかし、人々は、ただそういうものだとあきらめていたような。でも私は彼の頭が鈍いだなんて本当に言えたものなのかと考える。彼は単に蒔いた良き麦のどの種もむだになってしまうようなことが耐えられないのだ。良き麦と毒麦を分けるのは収穫のときにすれば、判断するのもより簡単になるだろうと思った。結局のところ、すべて主人の収穫物なのである。神の帝国は私たちの世界とは明らかに大きく異なっている。

それは良き麦か悪い麦かを判断するのは私たちではないということではないだろうか、たとえ話では自分たちではどうしようもできない話へと展開されていく。主人のとったような行動は私たちの文化の中にあってはきちがいじみたこととされてしまう。私たちはとても主人のような忍耐を持ち合わせていない。つまり神がどこに種が蒔かれるか気にしていなかったり、自分の麦の中に毒麦が入ってきてしまうことにも平然としていられるほどには忍耐できない。すくなくとも私たちはとても恵まれた環境に生きている、というのは交通渋滞で車がぜんぜん動かなくなったときとか、あるいは携帯電話で話すのに夢中になっている運転手の車の後ろで止まってしまったようなときのために、車の上にマシンガンを装着して起動させるような行為は法律で禁じられている。それでも、私たちはそんなことをしている暇はない、と言い次から次へと動いていく。私たちはとりのこされてしまうのに恐れをいだいている。大災害が起こってしまったような時だけが、私たちには何もできず、単に神のタイミングを待つ時だと思ってしまっている。われわれの生活において、とかく最後にはどうなってしまうのかを詳しく予測できるかのごとくに考えてしまう。だから今動かなければならないと思い、神の限りなく、また無差別な慈悲などに頼らず、自分に頼ってしまう。

しかし天国では、たとえ種を蒔く人が種をそこら中に撒き散らしても潤沢な収穫がある。そして敵が主の計画を倒そうとする試みがあっても、また最後まで立ちはだかる敵の脅威に対して我々人間が我慢できるかどうかに関係無しに、潤沢な収穫は実現する。この上なく寛大な神、みなさんの中に神の愛を植える方こそが、この上なく我慢強い方だ。神は豊富な種があるということをよくわかっていて確信があり、また働く時間も十分お持ちの方だ。だから私たちはリラックスできるのだ。今朝はぜひ深く深呼吸をして、自分たちの緊張を少々ほぐすようにしよう。そして、もし人間が考え得るものとは異なる超人的な神の手にあって、自分たちはだいじょうぶだという確信を持とう。神はそのような確信を得た私たちが必要とされる時や場所を備えてくださる。牧師として鶏のペットとともに登場するような人ではない候補を見つけるには、少々時間がかかるかもしれないが。　アーメン